

[論 文]

発達障害が疑われる女子学生に対する壺イメージ療法についての一考察  
— 学生相談室の支援活動と発達障害 —

A study on "Tsubo" imagery therapy for a female student who might has a developmental disorders  
— Support Activities in the Campus Counseling Room and Developmental Disorder —

中 島 暢 美

Nakajima Nobumi

**要約**

本研究の目的は、発達障害が疑われる学生に対して壺イメージ療法を試行する事例を報告し、学生相談において、学生相談室カウンセラーは彼らをどのように支援すればいいのかについて考察することである。

壺イメージ療法は、クライアントの内的イメージを膨らませて体験させる作業を中心とする代表的イメージ療法の一つである。クライアントは壺イメージ療法によって内界を譬喩として言語化し、身体を通して表現しようとした。

学生相談室カウンセラーは、限られた時間のなかで、クライアントの主訴を正しく理解し、クライアントの意向に添って対応する姿勢が重要である。このような「安全弁」に裏打ちされたカウンセラーの意図的態度は、クライアントの内的成長を促進した。クライアントは、“今”の自分を認め、“これから”の自分について自分で決めることが可能となった。

**ABSTRACT**

The purpose of this study is to show a case study of "Tsubo" imagery therapy for a female student who might have a developmental disorder and to discuss support for students with a developmental disorder in the campus counseling room.

"Tsubo" imagery therapy is one of the conventional imagery therapies in which the clients expand their inner image and experience it. The client here tried to verbalize her inner image and world using metaphors and to express herself with the body through "Tsubo" imagery therapy.

It is important for the counselors to understand the client's chief complaint correctly and to maintain a posture of responding to the client's needs in a limited time. The therapist's intentional attitudes supported by "a safety valve" for the client advanced her psychological growth. The client became able to accept her present self and to decide her future for herself.

## 1 はじめに

自閉症スペクトラム障害は、Barron-Cohen (2008) が「遺伝性の症状であることは、もはや疑いがない」と述べたように、遺伝性要因が強い疾患とされている(神保,2015)。自閉症スペクトラム障害や注意欠陥多動性障害が疑われる患児の脳機能画像や遺伝子検査では、脳機能の変異や神経伝達物質の脳内での働きについて遺伝子の特徴的知見が得られるというのが昨今の臨床医学の共通認識である(榊原,2020)。2005年に施行された発達障害者支援法第2条では、発達障害とは「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」と定められている。教育・研究機関である大学における学生支援の観点から、本論文はこれに準じ、以下では発達障害と記述する。

しかしながら、発達障害の定義は、その曖昧さが指摘され(滝川,2015)、学生相談でも困惑することがある。親は我が子の行動特徴が発達障害に起因すると診断されるまで苦渋の年月を過ごし、障害を認めたり否定したりする気持ちの間を揺れ動きながら医療機関に至るに違いない(宮内,2012)。医師は医学的・心理学的検査や状態像から総合的に診断するのだが、誤診、過小診断や過剰診断(小谷,2018)の傾向が存在する事実は否定できない。また、とりわけ軽度の発達障害の場合は、親が端から医療機関に相談しない場合も少なくない。確かに、発達障害児の遺伝子的特徴は、例えば脳機能が定型発達の場合と比して平均値が統計的に低い事を示しているに過ぎず、異常とまでは言えず、障害と断言することは難しい(榊原,2020)。そのため、患児の行動特徴が軽視されたり放置されたりする可能性が多々ある。生育環境によっては、不登校やひきこもりなど社会性の問題が顕著な二次障害に至ることも懸念される(中島,2010)。従って、成人になってから医療機関を訪れた場合には、症状や疾患について他の精神疾患との鑑別や合併に慎重を期し(宮岡ら,2019)、診断には身体的・精神的な併存症の評価(加藤ら,2019)が重要になってくる。

筆者は、医療機関で発達障害と診断された学生相談室の支援活動を報告してきた(中島,2003;中島,2005)。一方で、発達障害者支援法の施行前に幼少期を過ごした学生が多くを占める現況では、医療機関にかからず診断名はないものの、発達障害が疑われる事例も存在する。一次障害への対応もさることながら(中島,2005)、反社会的行動として現れる外在化障害や、非社会的行動として現れる内在化障害(中島,2019)のような二次障害への対応が緊要とされる。また、学生相談室で発達障害が疑われる学生を支援することができるのは、彼らの人生の僅かな時間に過ぎない。従って、学生相談は、眼前の学生を「よく観察し、理解し」(中島,2003)、二次障害が更に深刻化しないための堅実な支援活動がなされる場としてあらねばならないのだと考える。

さて、筆者は学生相談で壺イメージ療法を活用し、その高い安全性を確認してきた(中島,2004;中島,2006)。壺イメージ療法は、内的イメージを膨らませ体験させる作業を中心とする代表的イメージ療法(木南,1999)の一つである。考案者の田嶋(2019)は、壺イメージ療法では、「イメージ」「体験様式」と「安全弁」を重要視している。とりわけ「安全弁」については「他者や環境に脅かされることを防ぐ機能をはたす」と強調している。また、田嶋が心血を注いだ児童養護施設における発達障害児の臨床実践では、アセスメントよりも「多くの人々にとって当たり前保障され、自明のものである安全・安心」を優先した「安全弁」を「幾重にも重ね、活用して、人のところを抱えていくための工夫」に

ついて述べている（田嶋,2016）。

本論文では、発達障害が疑われる学生に対して、安全性の高い壺イメージ療法を試行する事例を報告、解釈し、学生相談室の支援活動について考察する。

## 2 事例の概要

**クライアント**：4年生の女子学生（21歳）、一人暮らし

**主訴**：「モヤモヤしたものを取り除きたい」

**面接方法**：隔週1回60分間の面接

**家族構成**：父親（50代）会社員、母親（50代）専業主婦、兄（20代）大学生

**治療歴など**：クライアントは、9歳から吃音があり、中2で不登校になったときは心理カウンセリングルームに通ったが効果はなかったという。進路は漠然として決まっていない。「ただ働きたくない」ので就職はしたくないという。最終学年のため卒業までに可能な範囲を扱うことをクライアントとカウンセラーが一緒に取り決めた。倫理的配慮として、終結後に学会で発表する可能性について説明し快諾を得た。

## 3 面接経過（クライアントの発言を「」、カウンセラーの発言を〈〉と表記する）

### （1）第1期 #1～#6（X年4月～6月）表象されるクライアントの心情

**#1** クライアント（以下ではCIと表記する）は、毎回、スカートやパンツなど色々な服装や靴で現われ、装いに合わせたピアスなどのアクセサリーも欠かさず、年相応のおしゃれを楽しんでいるように観えた。第一印象は礼儀正しい学生だったが、カウンセリングになると口を閉ざした。そこで、カウンセラー（以下ではCoと表記する）が壺イメージ療法を紹介するとCIは興味を示した。CIが「やってみたい」と言うので一度試してみることにした。まず、CoはCIに、ソファに楽な姿勢で座り、深呼吸して、身体力を抜いて、目を閉じてリラックスするよう教示した（以降、壺イメージ療法中のCIは閉眼している）。CoはCIに再度、始めても〈大丈夫ですか？〉と確認してから壺イメージ療法を始めた。Coは壺イメージ療法では〈大丈夫ですか？〉と頻りにCIに尋ね、CIが頑張り過ぎたり、無理をしないように常に気を配っている。Coは教示を始めた。〈あなたの目の前に壺のような容れ物が浮かんでくると思って、ゆっくり待っていてください。壺の中には、あなたの心の中のことが少しずつ入っています。あなたにとって楽しいものが入っているかもしれないし、苦しいものが入っているかもしれないし、嬉しいものが入っているかもしれないし、悲しいものが入っているかもしれません。また、自分でよくわかっているものが入っているかもしれませんし、何が何だかわからないものが入っているかもしれません。そういう壺が出てくると思って待っていてください。〉〈待っていると浮かんでくるかもしれないなあというぐらいの感じで、ぼんやりと待っていてください。浮かんできたらおしえてください。〉〈私はしばらく黙っていることもあるかもしれませんが、ちゃんとここにいますから安心してください。〉（以降、壺イメージ療法を行うときは毎回このように教示した。）ほどなく、壺は数えきれないほど表われた。CoはCIに壺を1つ選んでもらう。CIが選んだ壺はCIの持参した鞆くらいの大きさで、丸く、茶と白の「斑」色だった。Coは毎回、壺の大きさ、高さや形について、CIにジェスチャーで示してもらった。CoはCIに〈壺の表面を触ることはできますか？〉と促した。CIは両手の指で少しずつ慎

重に触っているようだった。〈どんな感じですか?〉と、壺イメージ療法では、CoはCIの〈感じ〉について幾度となく尋ねる。「…ザラザラしている。フワッとする感じが嫌。」〈壺に近づくことはできますか?〉「…はい。」〈壺の中を覗くことはできますか?〉「…はい。」〈気分はどうですか?〉「…あまりよくない。」〈大丈夫ですか?〉「…はい。」〈壺の中に入れそうですか?〉「無理。」〈手だけを入れるのはどうですか?〉「…はい。」〈どちらの手がいいですか?〉「左手。」CIが左手を壺の中に入れたようだったので〈どんな感じですか?〉と聞くと「冷たい」と言う。〈動かすことはできますか?〉「…上手く動かない…」〈では左手を壺から出しましょう。〉CIは左手を壺の中から出す。〈右手は…?〉CIは「できない。硬い…感じがある…」と眉間に皺を寄せる。〈左足は…?〉CIは左足を壺の中に入れ「少し冷たい。指先に…何か当たる…」と言う。左足を出してから〈右足は…?〉と尋ねると「できます」と即答するも眉間に皺を寄せる。「痛い。」〈大丈夫ですか?〉「…はい。」〈その感じを味わえますか?〉「…はい。」しばらくCIの〈感じ〉を味わってもらふ。〈大丈夫ですか?〉「…はい。」〈今はどんな感じですか?〉「痛くなくなった。…ぬるい。」右足を壺の中から出してもらふ。〈今、目の前の壺はどうなっていますか?〉「少し大きくなってクリーム色になっている。」〈大丈夫ですか?〉「…はい。」〈目の前の壺の感じをしばらく味わってください。〉Coは時計を見ながら2分間沈黙して待った。〈大丈夫ですか?〉「…はい。」〈今、目の前の壺はどうなっていますか?〉「大きさは同じ。色が濃くなった。」〈では、壺に蓋をしましょう。〉CIは数えきれないほど表われた全ての壺に蓋をせねばならないと思っており、蓋はできなかつた。CoはCIが頻りに眉間に皺を寄せていたので、終了後、〈よく頑張ったと思う〉と労うとCIの目元が潤んだ。初回面接が重要なのは周知の事実であるが、本事例では、とりわけ、この終了後のやりとりにおいて、CIは壺イメージ療法の「安全弁」を覚ることになったのではないかと思われる。**#2** Coは、CIに壺イメージ療法を続けるか否かを確認し、了解を得た。CIは〈鞆を持っていてもいいですか?〉と尋ね、鞆を膝の上に両手で抱えその上に顎を置くというのがCIにとって楽な姿勢で、壺イメージ療法ではこの姿勢が定着した。壺イメージ療法を始めると、壺が「いっぱい」表われたと言うので1つ選んでもらう。CIの身長ほどの高さで、丸く、白黒の「斑」色の壺だった。手で触ると「右手はザラザラ。左手はツルツル」で両手の感じが「だいぶん違う」らしい。大き過ぎて「抱きかかえることはできない」が、抱きつくと「心地良い感じ」だと言う。「安心します」と壺から離れるのに時間がかかった。蓋は二度試したが「できない」と言う。壺イメージ療法終了後、「(壺イメージを)きちんとできているのか。蓋も本当はできるのに、わざとしないのか、カラカラと転がり落ちて。えっ、閉まるだろって思った」と心配そうに打ち明けてくれた。CoはCIのイメージには〈全て意味がある〉と伝えた。CIはCoに対して訳知り顔に何度も相槌を打ったり、朝に強いので遅刻の心配はないと自慢げに話す一方で、来室を忘れ、連絡もないということが#7迄は何度も続いた。**#3** 前回は面接のことを忘れていたと幼児のように屈託なく笑う。壺イメージ療法では、CoはCIの内界で生まれてくるものをCIと一緒に待った。CIは、丸く黒い壺が一つだけ表われたと言う。CIが両手で触ると「ザラザラ」で「もろい。力を入れると割れそう」な壺だった。CIに、そっと抱えてもらおうと「赤ちゃんを抱いているみたい」と言う。CIは新木を組み合わせて丸く作られた蓋を閉め、終了後に「今日は、蓋はできると思っていた」と話す。「色々なことに区切りがついたというか諦めが

ついた。」#4 CIはCoがCIの壺イメージにとても興味を示すことが、不思議だけれど嬉しく感じていたのかもしれない。主体的に壺イメージ療法に臨んでいるような印象を受けた。淡い水色で高さ30センチほどの壺が表われた。壺口は丸く広いが、その下は細い首のように伸びて、底は丸い壺だった。触ると「ツルツル」だが壺口辺りは「ザラザラ」だという。左手を壺の中に入れて壺の内側を触ってもらおうと「すごい嫌！」と言うので、すぐに左手を出してもらおう。壺から出した左手は「あまり感覚がない」と言う。CIは、右手は壺の中に入れることができないと言いながらも手首まで入れた。「ザラザラして嫌な感じ」と言うと、CIに微かにロッキング<sup>1</sup>が出現した。Coは一瞬唖然とし、慌てて右手を出させるとロッキングが治まった。CIに壺から3歩ほど離れて壺を眺めてもらう。「気持ち悪い感じ。壺の右側に浮いている両目がずーっと見ている。あっちいってくれというような。」壺と同色の陶器で作られた蓋は合わず「手直しても合わなかった」ので「粘土」で蓋をしたと言う。#5 CIは無断キャンセルの後、再度予約して来室した。Coが〈前回（の壺イメージ）はしんどかったかな、と思った〉と言うと、CIは「本当は（壺イメージ療法を）今日あまりやりたくなかった」と返答した。Coは内心慌てて〈じゃあ、やめましょう〉と返した。するとCIは自分や家族について話し始めた。小学校受験を果たしたこと、父親は父親似のCIを溺愛し、不登校の時は「病名つくから病院には行くな」と言ったことが語られた。CIの兄は大学進学を機に家を出て、留年を繰り返し音信不通になっており家族の問題が見え隠れした。CI自身は「将来どうしたいとかいうのは何もない」らしく、「ただ働きたくない」ので就職はしたくないという。両親は進学に賛成で経済的支援は受けられるため、とりあえず「受かりそうなところへの」進学希望だが具体的には何も考えていないようだった。CIが「失敗はできない」と言うので〈あなたの言う失敗がわかりませんが…それでいいのですか？〉と伝えた。#6 CIは壺イメージ療法ができるか否か尋ねられると気が乗らなさそうに見えたが「やります」と言う。壺は2つ現れた。胸の辺りまでの高さの水色の丸い壺と、25センチほどの高さの四角い縦長のガラスの壺だった。丸い壺は「モチモチ。触って押すと、お餅のように引っ込むけど戻る。板が1枚中にあるので形は変わらない。触っているとサラサラになり気持ちいい」という。〈その感じを少し味わってみてください。…どんな感じですか？〉「ちょっと悲しくなってくる。」壺の中には小さい白兔が1匹いた。兔はCIと目が合うと鼻をピクピクさせる。〈兔のいる壺の中に入ることはできますか？〉「できます。」CIが壺の中に入って、壺の底に身体を添って座ると、兔は嫌がらずCIのお腹の上に乗ってキョロキョロしているという。Coは〈今の感じを十分に味わってください。十分に味わったと思ったらおしえてください〉と伝え、2分間ほど待った。「…はい。」〈大丈夫ですか？〉「はい。」〈壺から出ることはできますか？〉「…大丈夫です。」〈…出られましたか？〉「はい。」〈壺の中を覗くことはできますか？〉「はい。」〈何か見えますか？〉「黒い兔。こっちを見ている。」CIは白い陶器の蓋をしっかりと閉めた。〈ガラスの壺は…？〉「まだあります。」CIはガラスの壺を両手で持ち「良くも悪くもない」感じだと言う。〈その感じを味わってください。〉すると、CIは眉間に皺を寄せて苦しそうな垂れた。壺の中で「見たことある女の人が地団太踏んでもがいている」と言う。〈壺の中を覗くことはできますか？〉「小さい女の人がいる。…見たことある人。地団太踏んでもがいている。」〈壺の中に入ることはできますか？〉「…はい。」CIは広い壺の中で2歩程度の距離で女性と対面した。「地団太を踏んで自暴自棄

になっている女の人はCIを見ているという。〈壺の中の感じを十分味わったらおしえてください。〉「…大丈夫です。」〈壺から出ることはできますか?〉「…大丈夫です。」〈…出られましたか?〉「はい。」〈今はどんな感じですか?〉「ちょっと疲れたかな。」壺の中では女の人が蹲っていた。「疲れたのかな。」〈ずっと地団太踏んでいたから?〉「はい。」CIは、透明のゴムの中に花が詰められた蓋をしっかりと閉めた。壺イメージ療法終了後に〈気分はどうですか?〉と尋ねると「少し悪い」と言う。「今日は調子が悪かったのでテンション上げようと思って」おしゃべりして来たという。CIは、小6の頃から気分が波があり、自分が欲しい反応が得られず気分が悪くなると、誰かを傷つけないと、母親に叱られて壁を蹴り壊したりもしたが、罪悪感はなくスッキリしたと話す。「前と何も変わらない」と嘆き、翌回は来室しなかった。

## (2) 第2期 #7~#11 (X年7月~8月) 壺イメージとクライアントの心情の変化

**#7** 来室を忘れ、連絡もないということが何度も続いてきたため、CoはCIに来談意欲を確認した。CIは焦ったように「続けます!」と言う。また、CIは「立ち眩みのように頭がフワフワする」と、以前からあるという回転性めまいのような症状を訴えた。「ただ働きたくないから進学したいだけ」だが、父親が納得する進学先でないと経済的支援を受けられないという。父親に「進学しないのなら就職しろ」と言われ追い詰められていた。

**#8** Coが来室するとCIが準備万端で待っていたが、顔色が悪く小声で「体調悪い」と言う。「できると思う」と言うので壺イメージ療法を始めると、30センチほどの「ツルツル」した水色の壺が表われた。〈ツルツルした感じを味わってみてください…どんな感じですか?〉「…ん…なんとも。」CIは白い粉が入っているという壺の中に入る。壺の中ではCIは横向きに倒れており「力が抜けていく感じ」と言う。〈白い粉を触ってみてください…どんな感じですか?〉「…なにも…別に。」仰向けになってもらうと白い粉が「水で片栗粉をといたようにドロツとして」、うつ伏せになってもらうと身体が「沈むような感じ」と言う。Coは〈それを十分に味わってください…十分に味わったら起き上がってください〉と伝えた。いつのまにか、また横向きに倒れていたCIは「ん…起き上がれない…」と言う。すると、壺イメージ療法中は、いつも鞆の上に顎を置き俯いて話しているCIが急にムクツと起き上がり、眉間に皺を寄せて不服そうな表情に見えた。気分は「少し悪い」と言う。壺から出たCIに〈蓋はできますか?〉と尋ねると、CIの顔がピクツと動き「ビニールの蓋というか…閉めました」と言う。終了後、CIが「(壺イメージで) なんとも言えない、というのはダメなんですか」と訴えるように尋ねたので、Coは〈ここでは、あなたが言うことでダメなことは何もない〉と伝えた。**#9** 「いつもと比べたら」気分が良いと、終始ハキハキと話した。壺イメージ療法では、30センチほどの「ツルツル」した淡い水色の壺が表われた。壺を外側から支えるようにゴムの赤ん坊の両脚があり、その指先と踵が楽しそうにリズムカルに動いているという。CIが赤ん坊の踵を触ると壺が薄紫色に変わる。壺の中は明るく、内側は水色の擦りガラスでザラザラしていた。壺の底の中心には、歯が生え揃った1歳くらいの赤ん坊の頭部があった。赤ん坊の目が「ギョロツと開いて(CI)を見ている」。〈なんで見ているのですか?〉「わからない。あるから見てる。」〈あなたがいるから…?〉「はい。」CIは壺から出ても「ちょっと落ち着かない感じ」だと言う。古い木の蓋をしようとする「苦しくなるから」壺の肩辺りにある赤ん坊の左手が「反射的に」押し開けると言う。CoはCIに赤ん坊の左手を〈両手で包み込んでみてくだ

さい」と伝えた。〈…どうですか?〉「じっとしている。」赤ん坊の左手を静かに放して、蓋をして、壺イメージ療法を終了した。**#10**「調子は悪くない」というCIは壺イメージ療法を待っていたように感じられた。壺イメージ療法では、濃淡のある紫色のガラスの、首のない小さい丸い壺が表われた。「見た目よりは丈夫で、指で弾くとコイーンとどこかで聞いたことがある音がする。」制作に失敗した壺なので底が棘のように尖って床に置くと少し傾いてしまう。CIは壺の中に入ると「いつも自分を小さくして入っているけど、だいぶん小さくなっている。なので壺が広く感じる」と言う。壺の底の方でキョロキョロしながら歩きまわる指先ほどの猫と目が合ったりするが、ずっと見ているわけじゃないので嫌な感じはないという。壺口の上方には空が見えて、ガラスの底に映って反射し「雲がまばらにあって綺麗ですね」と気持ち良さそうだった。〈リラックスして空を見ていてください…どんな感じですか?〉「温かい気がします。」壺から出ると「ちょっと名残惜しいかな」と言う。丸い取っ手があるはめ込み型のガラスの蓋を閉める。〈この壺の蓋ですか?〉「そうだと思います。」終了後は「ちょっと残念ですけど、ほっとしている感じもある」と話す。**#11** CIは浮かない表情で来室した。壺イメージ療法では、膝下くらいの高さで縦に細長い蓋の閉まった水色の陶器の壺が3つ平行に並んで表われた。3つの壺の傍に「じっとしている」一匹の白蛇がいる。左側の壺は「ツルツル」だったが、CIは空気穴のある真ん中の壺の中に入った。CIは、ドロツとした液体が溜まっていた底は「嫌な感じはしません」、壺の内側の「サラサラ」の壁は「想像していたのとは少し違った」と言う。履いていたサンダルを脱ぐと足の裏が「ザラザラしてちょっと痛い」と言う。〈大丈夫ですか?〉「初めてじゃない感じ。」〈しばらく感じてみましょう…大丈夫ですか?〉「一瞬ウツとなりました。」〈大丈夫ですか?足の裏を感じているからですか?〉「わかりません。たまになる。今は大丈夫です。」壺から出たCIは、白蛇はCIを時々見るが「全然悪いものじゃない。自分の中に元々住んでいた気がする」と話す。〈どうしますか?〉CIは「入れた方がいいかもしれません」と蛇を手を持って、「ツルツル」の左側の壺の中に頭から落として蓋をした。終了後、CIは、隣家に住む父方の祖母と自分が口達者なところが似ており「どこもかしこもいい顔する自分が嫌」と告白した。

### (3) 第3期 #12~#21 (X年9月~X+1年1月) クライエントの“これから”

**#12** CIは帰省していた。CIが就職する決心を伝えても父親は平静に聞いてくれ、物腰が穏やかになっていたという。CIは就活のことや、子どもの頃からゲームが好きで友人がいなくても平気だったこと、地元には一緒に食事に出かける友人はいること、などを話し続けた。CoはCIが着々と就活をしていたことに驚いた。CIはCoが〈それでいいのですか?〉(#5)と尋ねたときから前向きに考え始めたのだという。Coは、CIが壺イメージ療法で定着した姿勢(#2)で話していたので、壺イメージ療法を行いたかったか尋ねると、なんとも言えない複雑な表情を浮かべ、それはまるで幼児のようだった。**#13** CIは両脚を開いて座り、CoはCIが地に足をしっかりつけている感じを受けた。壺イメージ療法では、光沢のある緑色の擦りガラスの壺が不安定に浮いて表われた。半透明の壺の底には赤黒い液体が少しだけ入っていた。Coには子宮のようなイメージが浮かんだ。CIが壺の中に入ると、足が「ヌルヌル」ぬかるんで踝まで浸かってしまう。Coが〈気持ち悪くないですか?〉と尋ねるもCIは「大丈夫です!」と、はっきり応えた。壺の内壁は黄緑色で、壺口に向かって「赤とピンクの花びらがたくさん散りばめられて綺麗」だという。底

の液体は「ドロドロ」した血だったが、触ると「軽くて水みたい」で「嫌な感じはない」と話す。〈そのまま味わってみましょう…どんな感じですか?〉「居心地は悪くない」。ワインボトル用の金具が付いたコルクの蓋が、この壺の蓋ではないが、ぴったり合った。「今までにはなかった変わった壺だった。(Coに)聞かれてわかるんじゃなくて、そこにあるものを触っている感じ。壺の外と内に今までなかった統一感があった。理にかなって現実的。」CIはCoに「聞き返されると、おかしいかな、まずかったのかな」と思う、という。CIは「質問には正しい答えがある。『好きな食べ物は何ですか?』の正解は料理名の焼き鳥で鶏肉というダメ。コミュニケーション能力があれば出来る事。相手の質問の意図を汲み取って応えられるかどうかが問われる」のだと話す。「急に嫌な事を思い出す時もあるけど、固執することがなくなったので最近では心穏やかに過ごしている。」#14 CoがCIの家族について聞くべきか逡巡していた時にCIが現れ、Coが驚いたのを見てCIは少し怒ったように「帰りましょうか?」と言う。壺イメージ療法では、高さのある横に広い分厚くて重そうな深緑色の壺が表われた。壺の表面は「ザラザラ」で、触ると剥がれて生クリームが出てくる「嫌な感じ」だという。壺の中に入ったCIは、底から1.5メートル程でうつ伏せに浮いていた。これまでにでてきた色々な壺が底にあり、落ちたら割れてしまうので、両手両足を力を入れていた。CIは壺の中から出てくるのにも時間がかかる。「出ようとしたら出られなくて…(前に)壺から出たことを思い出して…それで出られた」と説明するのも難しそうだった。丸い取っ手のついた急須の蓋のような陶器で蓋をして、上からテープで「ぐるぐる巻きにした」。「ボコボコしているので開くかもしれない」と、更に上からテープを巻き、「…大丈夫です」と言う。終了後、CIは就活が思うように進まないことへの焦りを口にした。「とりあえず、1年続けられるちゃんとしたところを探している」というCIに、Coが現実的に動いていると労うと目に涙を浮かべた。#15~18 CIは卒業研究を理由に就活を中断していた。CoはCIの身体症状や言動に発達的な問題を疑っており、生育歴や家族歴について聞く時期だと考えていた。CIに家族の話を知りたいと伝えるとCIは素直に応じたが、涙を拭いながら話すことになり、頻繁にあるという鼻血も出てしまった。CIは、小4の頃に友人がいないと気づき、我儘だが諦めは早く、人や物にそれほど興味がなかったことなど、自分の性質について取り繕うことなくありのままに語ってくれた。CIの父親は、優秀で「社会的に生きている価値がめちゃくちゃ」あり、家族旅行や誕生日会など形式的な家族行事もこなし、父親と顔が似ているCIを可愛がったという。しかし、「小3の頃、ピンクの服が欲しかったのに青でないとダメ」と言ったり、男の子向けの雑誌を読ませようとしたり、「理不尽。尊敬できるけど見習いたくない」と話す。また、父親は日頃から「成功しないような事はダメ」と言っており、CIの兄は父親に「金にならんからやめろ」と反対されて志望大学を断念したという。CIの兄はCIが受かった小学校受験に落ちていた。そのため、父親は中高一貫の進学校に行かせようとして息子の部屋で付きっきりで勉強させたという。「(兄に対して)すごい怒る。めっちゃ怖かった。ちよくちよく手も出た。」止めに入った母親にも暴力をふるうことがあったというが、CIには「お兄ちゃんが受験落ちるから」と兄に非があるような発言が散見された。父親は今や家族と音信不通の息子に「好かれていると思っている」ようだった。両親と一緒にゴミ屋敷になっていた兄のアパートに行くと、兄はベランダから逃げて行き、父親が送った食糧の段ボール箱が手つかずのまま放置されていたという。「兄が嫌がっていることをわ

かりたくないのか、自分のことをわかりたくないのか、よくわからない。」CIは壺を切ったように、父親の固執傾向や自己中心的で超多動な行動特徴に纏わる数々のエピソードを打ち明けた。また、隣家の父方祖父は、過去に多額の借金があったり、定年後はひきこもり状態であるなど親族の事情を赤裸々に語った。CIは自分が「父と同じ」かもしれないと嘆いた。**#19** 久しぶりに行った壺イメージ療法では、30センチほどの大きさの、クリーム色と茶色の「斑」色の壺が表われた。壺口と胴の間に10センチほど細い首がある。壺の外側は粘土のように柔らかい。二重構造になっており内側の壺は2ミリくらいの金属で、触ると凹む。Coが壺の中に〈入れますか?〉と聞くと、CIの左肩と左手がピクッと動いた。CIは壺の中に入ると「ボコボコしている」壺の底に足を伸ばして座っていた。「嫌ではない。〈何か見えますか?〉「壺の口の内側に小さいハンマーがいっぱいある。振り子のように叩く音がキンキンする。ちょっとうるさい。」その感じを味わってもらおう。終了後、CIは「壺の中に入った時から、良い靴を履いた可愛いヒラヒラの洋服を着た少女になっていた」ことを話した。Coからは(CIの卒業が確定したので)カウンセリングの終了が近づいていることを予告した。**#20** Coが壺イメージ療法をしたいか否かを尋ねると、CIは「うーん」と言葉を濁す。CIはカウンセリングの初期から就職について前向きに考え始め(#5)、学内の就職支援室でも相談し、CIのやり方で就活を続け、就職試験を受けていたことを話した。CIは「怖い。落ちたらどうしよう。ちょっと上を見ると下を見たら嫌になる」と泣き出す。父親は「こんな会社があるぞ」と頻繁に大量の就職情報を送りつけてくるといふ。CIは父親の情報で就職したら「やっぱり、お父さんの言うとおりでろうと。父の言う事は正解。正しい。成功する。自分でしょうとしたら成功が少なくなる。ちゃんと自分で決めたいなあ」と話した。**#21** CIから就職を果たしたとメールで連絡があり、「引き続き、もう少しの間よろしくお願いします」と面接を予約していた。入室したCIは終始落ち着いていた。〈壺イメージ療法はできますか?〉「はい」と、CIは躊躇なく応えた。壺イメージ療法では、「壺の首が指2本半しか入らないほど極端に細くなっている」丸い形の壺が表われた。触ると、首の部分は「ちょっとツルツとしている」が、黄土色の「斑」色になっている焼き物で「ザラザラ」だといふ。CIは壺の中に入ろうとしたときに、壺口から首にかけて「(指2本半しか入らないほど極端に細くなっているところから)折れたんですけど大丈夫ですかね。粘土みたいになって外に転がっている」と苦笑いする。そして、壺の中は「大丈夫です」と中に入った。CIは壺の底の真ん中に島のように盛り上がっているところに立っていた。「周りは黒い水。〈なぜ黒いのでしょうか?〉「水もしんどいんじゃないかな。」内壁は「斑」に星が描かれ「夜空…いや、宇宙があります」といふ。〈綺麗ですか?〉「はい。〈落ち着きますか?〉「落ち着きはしませんね。フワフワ。悪いフワフワではなくワクワクっていうか。」黒い水の上に綿菓子で敷き詰められ、CIは「今そこに乗って若干浮いている変な気分」だといふ。〈島に立っているのと綿菓子の上で浮いているのとどちらがいいですか?〉「綿菓子。」〈では、十分に味わってください。〉CIは数分間沈黙して味わっているようだった。「うーん、良い気分です。1時間くらいいたいかな。」〈では、もう少し味わってください。〉しばらくすると、CIは「真ん中の島で生まれたばかりの赤ちゃんが泣いている」といふ。〈どうしてあげればいいですか?〉CIは、黒い水で赤ん坊を洗って、綿菓子でくるんで、真ん中の島に置いた。赤ん坊は囀語で歌って気持ち良さそうだといふ。「やることやったって感じ。」Coは

〈壺の中の感じを身体全体で感じましょう〉と伝えた。しばらくするとCIは「大丈夫です」と言って壺から出た。壺口から首にかけて折れてしまったので、Coが〈蓋はできま  
すか?〉と尋ねた。CIは「折れた部分をペターッとくっつけて粘土でキュキュッと円錐形  
に絞った」という。〈しっかり閉まりましたか?〉「大丈夫です。」CIは「就職が決まって  
ほっとしたけど、父は(就職先が)不満。父の言うことは確かにそうなんですけどね」と  
父親に文句を言われたと話すが、以前と違って吹っ切れたような印象を受けた。卒業式ま  
で、就職先の研修を受けたり引っ越しの準備もあり多忙だが、友人とも遊びたいと楽しそ  
うに話した。Coがこれまでのカウンセリングの振り返りを行うと、壺イメージ療法に名  
残惜しさも少しあるようだった。Coが〈何事も腹八分目が良いのですよ〉と話すと、CI  
は「それなら今日(カウンセリングが)終わりでもいいです」と言う。CIの予定が卒業式  
まで詰まっていることもあり、合意の上でカウンセリングを終結することにした。卒業式  
の終了後、CIは挨拶に訪れてくれた。

## 4 考察

### (1) 壺イメージの解得

第1に、CoはCIによって言語化された“壺のイメージ”を確りと理解しなければなら  
ない。イメージは「〈喩〉あるいは〈像〉として現れ」(村瀬,1981)、それを「〈語る〉こ  
とは真の意味で〈名づける〉ことであり、言葉による外界の解釈」(丸山,1987)である。  
壺イメージ療法では、CIの内界を“壺のイメージ”が多彩な様相でCIに訴えかけ、CIはそ  
れをいちいち言語化してCoに伝えているのだと思われる。

本事例では、とりわけ壺の蓋について示唆に富むイメージが語られた。一つとして同じ  
壺は表われなかったが、壺の蓋も、あたかも洋服にアクセサリーを合わせて楽しんでいる  
(#1)かのように様々だった。赤ん坊のような壺には新木の蓋(#3)、白兔がいる壺には  
白い蓋(#6)、ガラスの壺の蓋には花が詰められていた(#6)。壺イメージ療法では、重  
篤な精神疾患を対象とする場合を含め、蓋は慎重に扱わねばならない(田嶋,2019)。CI  
は初端において、全ての壺に蓋をせねばならない(#1)、蓋が閉まると思ったのにできな  
かった(#2)と、壺の蓋についての“思い入れ”を披瀝した。CoはCIの壺は蓋を含めて  
総体的に観ていくことに〈意味がある〉(#2)と考えた。すると、CIは、失敗作の、首の  
ない丸い壺の中に、かなり小さくなって入り、「ちょっと残念なんですけど、ほっとして  
いる感じ」を得るようになる(#10)。きちんと閉まるはめ込み型の蓋や反射光の美しさ  
のみならず、傾いた底も含めてCIの精神健康度が期待されるイメージだと思われた。しか  
し、進路について「失敗はできない」(#5)、「成功しない事はダメ」(#15~#18)と教え  
られてきたというCIは、壺に蓋をすることも「失敗はできない」、壺に蓋ができないのは  
「ダメ」という“思い入れ”はなかなか変わらないようだった。子どもの欲求や感情、能  
力を無視し、親の欲求や期待に一致する程度に応じて子どもを評価する強迫的な「親よ  
る子どもの巻き込み現象」(福留,1996)が、CIの親子関係においても見受けられた。CIは、  
蓋ができない壺には「粘土」を詰めたり(#4)、「開くかもしれない」蓋はテープで抑え  
て取り繕おうとした(#14)。終了回では、首から折れてしまった壺も「粘土」で粗雑に  
蓋をしていた(#21)。蓋とは、そもそも何かに被せて覆い塞ぐものである。極端に細く  
なっている首の壺(#4,#21)は、CIが壺に入ることを妨げているかのようだったが、実

は蓋も、CIにとっては、時には威圧感のようなものを与えていたのかもしれない。CIは成功せずとも「ちゃんと自分で決めたいなあ」(#20)と吐露した。壺の極端に細い首の部分から折れてしまったと苦笑しながら言えた(#21)のは、CIが壺の蓋についての“思い入れ”を半ば諦めたからではなかったのだろうか。すなわち、CIの精神健康度が「大丈夫」(#21)と言えるくらいまでには安定したのではないかと考える。

第2に、CoはCIの譬喩を直観しなければならない。尼崎(1990)は、「譬喩の多くがある事象に対する私たちの思い入れや態度を語ろうとするところから生まれたもの」(下線は筆者による)と述べている。壺イメージ療法において重要視される「体験様式」(田嶋,2019)の変化を、CIは自らの身体を辿って体现し、譬喩として伝えているのだと思われる。

本事例では、CIは壺のイメージに譬喩を多用した。CIの表情や身体の動きは微妙に、明らかに、不断に変化し(#1,#4,#6,#8)、CIはその動きに呼応するようにオノマトペを発した。日本語のオノマトペは、身体と密接に結びついたその身体性が特徴とされ、感覚的で感性に訴える表現を発声する行為自体が大切とされている(葛西,2012 吉村,2015)。とりわけ、言葉が未熟な幼児は、その身体のありようをオノマトペで伝え、「言語を獲得する際に感覚とことばをつなぐ手がかり」(中西,2020)にしている。幼児は身体全体でこの世界と共生しているため、幼児と身体は切り離すことができないからである。CIの退行現象は、小動物(#6,#10)や赤ん坊(#9,#21)として具現化された。市川(2004)は、「不安定ななかで抛り所になるのは、身体である自分と身体的な成熟(成人化)でしかない」とする。CIは赤ん坊を、第二次性徴を迎える(#13)少女にまで成長させた(#19)。「理にかなって現実的」な壺は、子宮を連想させるような形に血が入っており、蓋はワインボトルのコルクだった(#13)。木村ら(2006)は、「主体が主体性をもつのは、生命に繋がっていることなんだというのは、非常に重要な捉え方」としている。Coには、CIが一人の女性としての自分を受け入れていくイメージとして伝わった。「ヌルヌル」(#13)には、粘液上のもことによって滑りやすく不快な感じという意味と、滑らかに移動する様という意味がある。CIが「ちょっと悲しく」(#6)なったり、「何も変わらない」(#6)と嘆きながらも、果敢に挑んでいたのは壺イメージだけではなかったことが後に明らかになった(#12)。初期から登場した水色の壺の「ツルツル」(#4,#8,#9)には、生命力に満ち滑らかに前進する様が表現されている。「サラサラ」(#6,#11)は、「『美しい』といった肯定的な語句と共に用いられ」「よどみなく進むようす」(Pantcheva,2006)を表している。CIの壺は「モチモチ」と弾力性があり頑丈な壺(#6)、ガラスだけれど「見た目よりは丈夫」な壺(#10)、二重構造の壺(#19)へと強化されていった。一方、CIが「嫌な感じ」(#1,#4)とした「ザラザラ」の壺は終了回迄表われ、その感じは変わることはないようだった。「ザラザラ」は、細かい凹凸があり滑らかではない様を表し、「『不適切さ・汚い・鈍い』といった悪いニュアンスや『重い・大きい・強い』といった意味」(Pantcheva,2006)がある。CIは、「ザラザラ」した感じを払拭できなくても自分は「大丈夫」(#21)と言える確信のようなものを持ち得たのではないかと考える。なぜなら、「ザラザラ」と同様に初期から表われた「フワツとする」(#1)感じは、「悪いフワフワではなくワクワク」(#21)に変化していたからである。「ワクワク」は楽しい期待などで胸が躍る様を表している。CIはまさに“今”自分がやるべき事をやり終え、“これから”の自分を見つめよ

うとしているようだった。CoはCIの「やることやったって感じ」を〈身体全体で感じましょう〉と促した。尼崎(1990)は、「身体が言葉の意味を確認しているとき、最も意味消失は起こりにくい」とし、「意味の発生の源にあるものは、言葉ではなく、世界そのものが(あるいは世界の中の諸々の事物が)意味に満ちたものとして」自分の前に立ち現れるか否かだと述べている。CIはそれを「宇宙」(#21)としたのだと考える。

## (2) 主訴の意味

CIは主訴も「モヤモヤしたものを取り除きたい」と譬喩で表現した。

CIの主訴は具体的にはどういう意味だったのだろうか。「モヤモヤ」は、ハッキリせず、不安や不満があり心が落ち着かない様を表している。面接が進むにつれ、CoはCIの児童期の吃音や不登校等に先天的要因の可能性を疑い始めた(中島,2019)。CIは児童期から観られる癩癩(#6)、以前からあるという回転性めまい(#7)、鼻血(#15~#18)、嘔気(#11)の症状について吐露した。面接では、忘れたと言って来室しなかったり(#2~)、壺イメージの最中にロッキングが出現(#4)した。これらの症状はCIの家族のなかで「モヤモヤしたもの」=ハッキリさせたくないものとして既に存在していたのではないだろうか。父親が病院に行くこと抑止した(#5)のは、娘に発達的問題のようなものを感じていたのかもしれない。父親の行動特徴に纏わる数々のエピソードや、親族の事情(#15~#18)からも、「モヤモヤしたもの」の遺伝的要因の可能性が疑われた。発達障害の特徴の一つとして親に従順なことがある(Howlin,1997)。CIは父親と酷似しており、他の家族よりも理解し合える明白な性質について語られた。「質問には正しい答えがある」(#13)という話は、恐らく父親が説き、CIにとっては非常にわかり易く、圧倒的に「正解」(#20)だったのだろう。兄のエピソードも後押しし、「失敗はできない」(#5)という“思い入れ”が容易に強化されたことが推測される。木村(2005a)は、常識とは「外面的・公共的な行動規制ではなく」「深く内面的間主観性に関わる状況感覚のこと」と述べている。壺イメージの変化とともに、CIの“思い入れ”は、最後には「父の言うことは確かにそうなんですけどね」(#21)とCIの譲歩へと変化している。

一方、CIは壺イメージで「モヤモヤ」というオノマトペを発することはなかった。田嶋(2003)は、「現実を扱うことは心を扱うことである」と述べている。本事例では、最初に、最終学年のため卒業までに可能な範囲を扱うことをCIとCoで取り決めた。CIが「モヤモヤ」と言わなかったのは、この治療契約(島田,2010)に依るところが大きいと思われる。CIの問題が発達障害に係るものならば、容易に解決できる問題ではなく、現病歴、生活歴、家族歴も鑑み、時間を要し、期間限定の面接で審らかにできるはずもない。また、医学的診断結果として明確になってしまうと、CIや家族がハッキリしてこなかったものを扱えなくなることができなくなる。「人には個々の『語り方』があるように、個々の『治り方』というのがある」(中島,2004)。CIは「モヤモヤしたものを取り除きたい」が、“今”は未だ困難であることを壺イメージで表現していたのかもしれない。CIの壺は「斑」色で始まり(#1)、「斑」色で終わった(#21)。「斑」とは、異なる色が所々に混じっていたり、色に濃淡があったりすることである。「斑」色の壺は、様々なものが混然と存在しており、「モヤモヤしたもの」だけを取り除くことが不可能なことを示唆していたのではないだろうか。

壺イメージ療法はCIとCoの非現実的な空間であるが、学生相談はCIとCoの現実である。もし、Coが発達障害という診断名に囚われ過ぎるようなことがあれば、眼前のCIが“今”希求しているものを見失うことが憂慮される。筆者は、児童・生徒期までの発達障害の事例は保護者や医療機関と連携しつつ進める方が好ましく（中島,2015;中島,2016）、大学以降の典型的な事例も同様に考えている（中島,2005）。しかしながら、学生相談では、発達障害による現実の問題が顕著ではなく、相談期間が限られている場合も多い。従って、医療機関での診断がなく、発達障害が疑われる程度の事例については、まずはCIの主訴を正しく理解し、“今”のCIの意向に添って対応する姿勢が望ましいのではないかと考える。

### （3）意図的態度を含む「安全弁」

壺イメージ療法の特徴は、危機的体験が急激に進み過ぎないように「安全弁」を備え、運用原則は壺が「安全弁」として機能する、その安全性の高さにある。Coが「安全弁」に配慮しているが故に、限られた期間であっても、「心の深いところにアクセス可能」となり、「悩み方などの体験様式の変化に確実に反映される」（田嶋,2019）のである。

筆者は、「安全弁」を備えた治療関係には、CIに対するCoの意図的態度が含まれていると考える。意図的態度とは、CIを“抱える構え”であり、CIに対して“いつも、すでに”配慮を示し、CIとの心理的な繋がりを作り出すことを目的とした心身の構えである（中島,2006）。木村（1994）は、臨床におけるCIとCoの『『あいだ』のはたらきをリアルな認識対象として』「経験しようとするれば、みずからその行為の中へ身を置いて、行為を通じてそれを感じとるほかはない」と述べている。壺イメージ療法においては、Coは「言葉のやりとりの水面下で互いに相手の身体をなぞり、その態勢（つまり意味を）身体で理解」（尼崎,1990）しようとしているのではないだろうか。Coは、CIと同じ表象を意識に浮かべるといよりも、CIと同じ心身態勢に成ろうとするのである。このようなCIとCoの「あいだ」において、CIは“今”の自分を言葉化してCoに伝えようとするのではないだろうか。

また、「安全弁」を備えた治療関係におけるCoの意図的態度（中島,2006）は、“今”の心理的安定を得たCIが、“これから”について考えることを無理なく後押ししたのではないだろうか。壺イメージ療法に「含まれる視点は壺イメージ療法のみ有効なものでは決してない」（田嶋,2019）。CIはいつも誰かに見張られて監視されているようなイメージを語った（#4,#9）。それは、尊敬できるが見習いたくない父親（#15～#18）の支配下にいる「落ち着かない感じ」（#9）と、一方では惰性的安定感といった両価的感情として存在し、CIにとって手放し難いものだったのかもしれない。壺イメージを「本当は今日あまりやりたくなかった」（#5）と言ったり、なんとも言えない複雑な表情を浮かべたりした（#12）CIは甘える幼児のようであった。壺イメージ療法では、CoはCIに〈大丈夫ですか？〉と頻りに尋ね、CIが頑張り過ぎたり無理をしないように配慮した。すると、CIには「大丈夫です」と言い切ったり、自分に言い聞かせたり確認しているような応答が随所に観られるようになった。幼児は、自分にとって大事な人である養育者などがかけてくれた言葉を内面化し、自分を宥めたり、励ましたりするために、それを自分に向かって使うようになる。木村（2005b）は、他者と関係を持つというのは「生きていることの一局面」であり、他者との「あいだ」における「一種の働き」は「生命活動一般と直結している」と述べ、

「自分の役割行動と周囲の期待とのあいだに距離を置く」（木村ら,2006）ことが健康な生き方だとしている。CIに対するCoの意図的態度が含まれた安全な治療関係においては、CIにとって心的エネルギーと交流し新たな活動を始める前の健康的な退行が生じていたのだと思われる。

壺イメージ療法が行われたのは面接全体の約6割であった。CIは壺イメージを浮かべたり、眺めたり、壺を触ったり、壺に抱きついたり、壺の中を覗いたり、壺の中に入ったりした。CIは、最初は恐る恐る、用心しながら、更には躊躇なく壺イメージに臨んだ。それは、意図的態度を含む「安全弁」が壺イメージ療法を通してずっと機能していたことの証であると考えられる。

## 5 おわりに

筆者は眼前の学生を「よく観察し、理解し」、「個々の学生のペースで卒業に至るまでを支援」することを「学生相談室の主たる仕事」として常に念頭に置いている（中島,2003）。発達障害児・者のコミュニケーション障害は自己評価を低くし易い（星野,1999）。軽度や発達障害が疑われる程度かもしれない場合でも、学生生活や社会生活に様々な困難を生じている、あるいは生じていく可能性は軽視できない。支援を求める学生が絶えないのは、学生相談室の支援活動が、“今”と“これから”を生きる彼らにとって社会的猶予期間最後の駆け込み寺になっているのかもしれない。しかしながら、学生相談室カウンセラーが、限りある時間の中で、果たしてどのような支援が可能なのか苦悩することも多い。

本臨床実践は、発達障害が疑われる青年期の学生に対しての理解を深め、不登校から深刻なひきこもりなどに至る現代社会の問題を踏まえつつ、学生相談室の支援活動について議論するために意義ある試みと考える。

## 付 記

本事例は、第38回学生相談学会で発表したものである。発表の際、座長としての労をおとりくださいました久留米大学の徳田智代教授に感謝申し上げます。

## 注

- i 不適切行動とされる、身体を前後に揺する自己刺激行動、反復的行動パターンのこと

## 文 献

- 尼崎彬 1990 ことばと身体, 頸草書房
- Barron-Cohen, Simon 2008 *Autism and Asperger-Syndrome: The Facts*. Oxford University Press.
- (水野薫・鳥居深雪・岡田智訳 2011 自閉症スペクトラム入門 脳・心理から教育・治療までの最新知識, 中央法規)
- 福留留美 1996 強迫性格の親による巻き込みについて—青年期強迫神経症の事例から—, 心理臨床学研究, 14(1), 33-43
- 星野仁彦 1999 アスペルガー症候群の青年期における諸問題, 精神科治療学, 14(1), 15-22
- Howlin, Patricia 1997 *Autism: Preparing for Adulthood*, Routledge. (久保紘章・谷口政隆・鈴木正子監訳 2000 自閉症 成人期にむけての準備, ぶどう社)
- 市川浩 2004 精神としての身体, 講談社学術文庫
- 神保恵理子 2015 発達障害における遺伝的要因(先天的素因)について. 脳と発達 47: 215(9), 57-61
- 葛西健治 2012 こどものうたにおけるオノマトペに関する一考察, こども教育宝仙大学紀要 3, 33-43.
- 加藤秀一・尾崎紀夫 2019 自閉スペクトラム症—診断上の留意点と, 発症メカニズムの最近の見解について—. 臨床神経学, 59(1), 13-19
- 木村敏 1994 心の病理を考える, 岩波新書
- 木村敏 2005a 関係としての自己, みすず書房
- 木村敏 2005b あいだ, 筑摩学芸文庫
- 木村敏・檜垣立哉 2006 生命と現実 木村敏との対談, 河出書房新社
- 木南千枝 1999 氏原寛他編 カウンセリング辞典, ミネルヴァ書房
- 小谷俊博 2018 発達障害の過剰診断について, 木更津工業高等専門学校紀要, 51, 11-16
- 丸山圭三郎 1987 言葉と無意識, 講談社現代新書
- 宮岡等・小川陽子 2019 大人の発達障害と精神疾患の鑑別と合併—その意義—, 心身医学, 59(5), 416-421
- 宮内環 2012 発達障がい児をもつ家族に関する文献研究—心理社会的な問題に関する研究の動向と課題—. 小児保健研究, 71(2), 282-288
- 村瀬学 1981 初期心的現象の世界 理解のおくれの本質を考える, 大和書房
- 中島暢美 2003 高機能広汎性発達障害の学生に対する学内支援活動—アスペルガー障害の学生の一事例より—. 学生相談研究, 24(2), 129-137
- 中島暢美 2004 壺イメージとしての夢を語る過程—トラウマの治癒—. 心理臨床学研究, 22(2), 117-127
- 中島暢美 2005 高機能広汎性発達障害の学生に対する学生相談室の支援活動—アスペルガー障害の学生に対する教育的面接過程—. 学生相談研究, 25(3), 224-236
- 中島暢美 2006 就職活動ができない男子学生への壺イメージ療法についての一考察—トラウマの治癒—. 心理臨床学研究, 24(2), 166-176
- 中島暢美 2010 障害児の遊戯療法過程. 神戸山手大学紀要, 12, 91-118
- 中島暢美 2015 学校臨床における連携をめぐって—広汎性発達障害の生徒の事例から—. 京都橘大学心理臨床センター, 心理相談研究, 創刊号, 63-72
- 中島暢美 2016 学校臨床における連携の実際—広汎性発達障害の生徒の事例から—. 京都橘大学心理臨床センター, 心理相談研究, 2, 77-84
- 中島暢美 2019 第16章 情緒障害児・精神障害児への支援と理解. 218-229 杉本敏夫編, 新・はじめ

- て学ぶ社会福祉 6 障害児の保育・福祉と特別支援教育, ミネルヴァ書房
- 中西一彦 2020 幼児期の言語獲得におけるオノマトペの役割, 関西国際大学教育総合研究所紀要, 13, 71-79
- Pantcheva, Elena Latchezarova 2006 日本語の擬声語・擬態語における形態と意味の相関についての研究 千大院社博甲第文, 43, 1-297.
- 榊原洋一 2020 子どもの発達障害 誤診の危機 ポプラ新書
- 島田涼子 2010 心理療法における治療契約の意味, 心身健康科学, 6(2)72-76
- 田嶋誠一 2003 臨床心理行為の現状と課題—まとめに代えて, 氏原寛・田嶋誠一編, 臨床心理行為 心理臨床家でないといけないこと, 創元社
- 田嶋誠一 2016 現実に介入しつつ心に関わる「展開編」, 金剛出版
- 田嶋誠一 2019 壺イメージ療法—その生いたちと事例研究, 創元社
- 滝川一廣 2015 発達論的視点から見た自閉症スペクトラム, そだちの科学, 24, 2-12
- 吉村耕治 2015 日英語の比較の観点から見たオノマトペ—感性の表現の魅力—, 表現学会編, 表現研究, 102, 7-18.